

四季の響き

森野 水琴

九月という実感が無いまま十月になったのは、もう十年も前のことだったろうか。

最近では、今年の秋は何日あっただろうかと話題になるほどである。

四季どころか、夏と冬しかない二季ともいうべき現状である。

四季折々の趣きを楽しみたくて、彼は仮想ツアーに申し込んだ。

ツアーの集合場所に行ってみると、ガイドがツアーの説明をしてくれ、宿泊所への移動の車に連れていってくれた。

行き先を秘密にするため座席から外は見えないようになっていた。

宿泊所に着くと歓迎の夕食でもてなしてくれた。

翌日からの四季を楽しむ趣向に胸躍らせて彼は眠りについた。

目覚めると冬だった。

平安時代の京都に來ているらしい。

底冷えするのだが、公家とおぼしき男たちが雪見酒を楽しんでいる。

雪が音を吸収して降りしきる、その静寂が彼の心に沁みる。

冬の響きはあまりにも静かである。

降る雪に心を洗われるように彼は泣く。

はらはらと 流れる涙 しんしんと

心に響く 雪のまにまに

翌日は春だった。

男たちは花見酒を楽しんでいる。

雅楽が奏でられ、舞姫たちが舞う中、ますます満開の桜が愛でられていく。それが聞こえるのだろうか、桜が微笑んでいるかのようなのである。

見る人の 喜ぶ声が 響くなか

微笑みながら 咲き誇る花

初版

さらに翌日は夏だった。とにかく暑すぎる。

昼の外出は止めて、夕方に鴨川のほとりに出かけ食事することになった。鴨川からの風に風鈴が響く。一服の涼をもたらしてくれる。

夕暮れの 川の流れに そよぐ風

鈴を揺らして 涼しく響く

最終日は秋だった。

男たちは月見酒を楽しんでいる。

諸国からの贈り物だろうか、実りの秋にふさわしい品々が膳を彩る。

ここでも雅楽が奏でられ、舞姫を月の光が照らす。

虫の鳴き声が聞こえるのも秋ならではの光景である。

明日からは日常に戻るかと思うと、名残惜しいあまり彼は夜通し月見酒に酔うのであった。

ひととせの 実りを愛でて つむがれる

響きを照らす 月の光よ